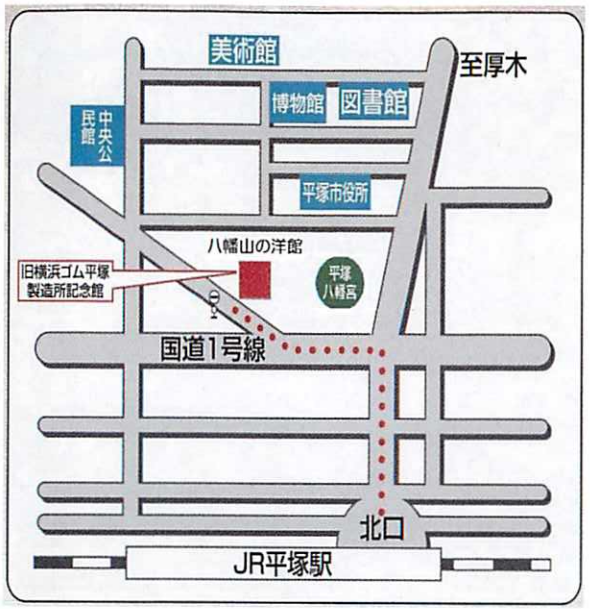
ひらつか八幡山の洋館 【旧横浜ゴム平塚製造所記念館】



入館案内

開館時間
9時から21時30分まで

休館日
毎週月曜日（休日の場合は原則翌日）、年末年始

見　学
自由　無料
ただし、会議室使用中は室内を見ることができない場合があります。

遊館日
毎月1回（原則第3水曜日）、全館を開放し、館内をご案内します。当日の催しは、自由に参観できます。

施設利用

第1会議室（定員60人）、第2会議室（定員40人）は有料にて使用することができます。ただし事前に利用者登録が必要です。

所在地　〒254－0041
平塚市浅間町1番1号　八幡山公園内

電話・ファクス
0463－35－7114
ホームページ
http://hiratsuka-yokan1906.jp

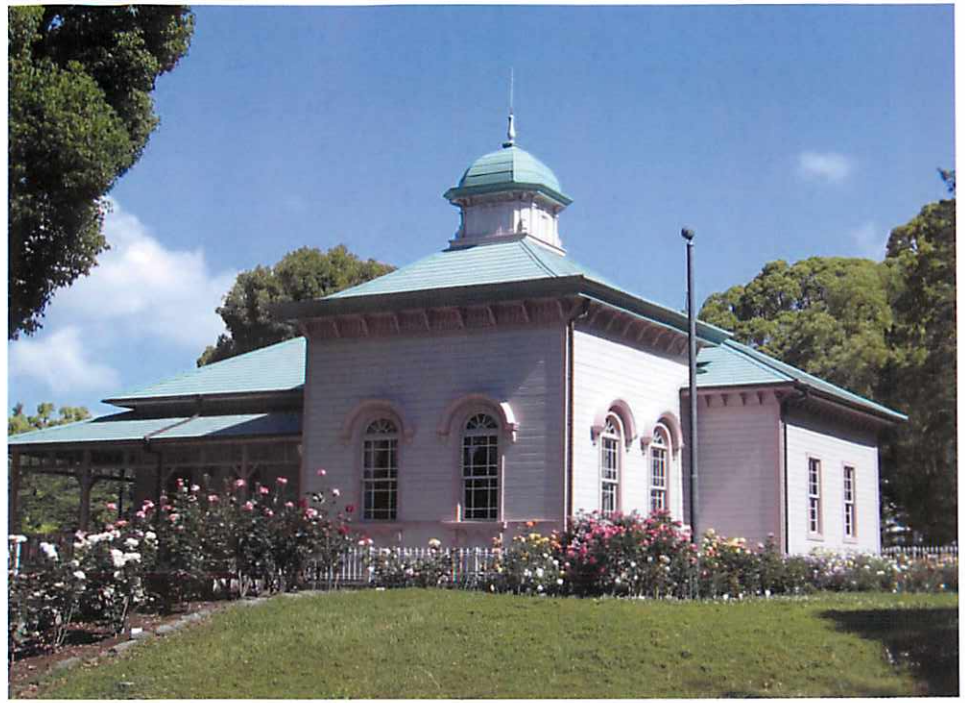
◎八幡山の洋館指定管理者
八幡山の洋館運営管理共同事業体

◎所管　平塚市教育委員会社会教育課
電話　0463－35－8124（直通）

出典　平塚市教育委員会編集・発行「登録有形文化財旧横浜ゴム平塚製造所記念館解体調査報告書及び移築・復原工事報告書」、平塚市発行「平塚市史」、平塚市中央図書館発行「海軍火薬廠小年表」ほか

ひらつか八幡山の洋館

【旧横浜ゴム平塚製造所記念館】



建物を活かし、文化を活かす国の登録有形文化財　第14―0086号

平塚の文化の発信拠点として、まちづくりや観光のために活用していきます。

国の登録有形文化財は、建築物、土木構造物及びその他の工作物のうち、原則として建設後50年を経過し、かつ、(1)国土の歴史的景観に寄与しているもの、(2)造形の規範となっているもの、(3)再現することが容易でないもので、まちづくりや観光などに、積極的に活用されることが期待されるものです。

平 塚 と 洋 館

857 年（天安元年）2 月 26 日、東国に下向していた桓武天皇の 3 代の孫の高見王の娘政子が、この地で没し、その棺を埋めて塚を作ったところ、この塚の上が平らであったところから「平塚」の地名が起こったといわれています。
（平塚の碑より）

1596 年（文禄 5 年）、徳川家康の命により江戸・駿府の往復や鷹狩の宿舎として中原村に御殿が造営されました。

1601 年（慶長 6 年）、平塚は、徳川が設けた宿駅制により宿場町になりました。時を同じくして、御殿のある中原村を中心に平塚宿、平塚新宿、須賀村、馬入村、八幡村、南原村にまたがる 16 か所 36 万坪に松林が造成されました。

1887 年（明治 20 年）7 月、横浜・国府津間の鉄道が開通。平塚駅が開業し、平塚は都市化、工業化が進みました。

1905 年（明治 38 年）、日本海軍はイギリスのアームストロング社、チルウォーズ社、ノーベル社と合弁会社「日本火薬製造株式会社」を設立し、平塚に火薬工場を建設して、敷地内にイギリス人技術者の宿舎等とともに食堂・ホール（洋館）が建てられました。火災で焼失しますが、1912 年（明治 45 年）に再建されました

イギリスから来た 23 人の技術者たちは、平塚の人々と交流を深め、一部の人は平塚、大磯に住まいを定めイギリス文化を広めて、契約期間の 10 年が経過した後に、帰国しました。

1919 年（大正 8 年）火薬工場は「海軍火薬廠」に引き渡され、食堂・ホール（洋館）は、海軍将校クラブである横須賀水交社平塚集会所として使用されました。（当時の従業員は 600 人）

1923 年（大正 12 年）9 月 1 日、関東大震災に見舞われ、倒壊は免れましたが集会所（洋館）の各室に備えられていた暖炉は破損し、復旧工事で暖炉は除去されました。

1932 年（昭和 7 年）4 月 1 日、平塚は、横浜、横須賀、川崎に次ぎ、県下 4 番目の市となりました。当時の戸数は 7,404 戸、人口 36,028 人、市域面積は 10.87 ㎢でした。

1944 年（昭和 19 年）終戦直前の火薬廠従業員は約 4,400 人、徴用工員と動員学徒は約 4,000 人でした。

1945 年（昭和 20 年）7 月 16 日、空襲を受け、市街地の大半は焼失しましたが、この集会所（洋館）は残りました。終戦後、火薬廠は進駐軍に接収されました。

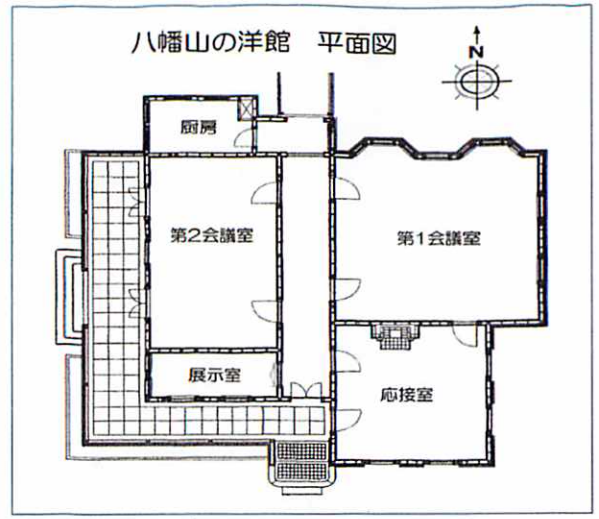
1950 年（昭和 25 年）火薬廠敷地の一部が集会所とともに横浜ゴム（株）に払い下げられ、会議室、応接室として使用されてきました。

1955 年（昭和 30 年）、神奈川県で開催する第 10 回秋季国民体育大会を機に、大規模な改修が行われ創建当時の姿に復されました。

大正期

移築直後

2004 年（平成 16 年）、保存していくために平塚市が譲り受け、同年 7 月 23 日に国の登録有形文化財に登録し、八幡山公園に移築して、2009 年（平成 21 年）4 月 1 日に一般公開しました。



木造平屋建て　塔屋付き
屋根 ；カラー鋼板平葺
外壁 ；ドイツ下見板張り
布基礎
建築面積　212.83㎡

洋館の特徴は、外観にあります。

特に、塔屋を戴く南東部の主屋（応接室部分）は、他の 2 室に比べ面積的には最も狭いのですが、意匠的密度は濃く、洋館の建築的魅力はこの部分に尽くされていると言えます。塔屋の形は、古典主義建築のドームのミニチュアで、主屋の魅力となっています。

主屋部分の 4 つの窓は、上部がアーチになっており、また窓の上部には手の込んだペディメント（コロネット：小さな王冠の意）と、窓の下部にエプロン風の飾りを有しています。

第 1 会議室の北側側面には、床レベルから突き出した八角形平面のベイウィンドウが 2 か所設けられています。

第 2 会議室の南と西の二方にベランダが廻されていて、コロニアルスタイルと呼ばれる住宅建築的な色彩が濃くなっています。

内壁は、廊下の腰壁部分が堅羽目板であることを除けば全て漆喰塗です。

基礎は、まず石を置き、その上に煉瓦を積み、さらにその上に石を置いています。
そして上部がアーチの石組で換気口を設けています。

応　接　室

第1会議室（定員60名）

第2会議室（定員40名）